

子どもの貧困・格差の拡大に コミュニティはどう向き合うか

ゲスト講師 村井 琢哉 (NPO法人山科醍醐こどものひろば 理事長)

目次

1. 山科醍醐こどものひろばについて
2. 子どもをとりまく問題の増加
3. 子どもの貧困とは
4. 民間・行政・地域の役割
5. 道筋・回路・価値をつくる
6. 他者との共存と出会いの場づくり

※このレクチャー・ドキュメントは、同志社大学大学院総合政策科学研究科とCEL（大阪ガス エネルギー・文化研究所）の教育研究協力協定に基づいて開設した「コミュニティ・デザイン論研究」講座から、2017年12月18日に同志社大学で行われた授業の一部をまとめたものです。

1. 山科醍醐こどものひろばについて

山科醍醐こどものひろばは、京都市の山科区と伏見区の醍醐という地域の中で活動している団体。今日は、そこで今行っている活動についてお話ししたい。

私は、この団体に子どものころから参加者として約30年関わってきて、気が付いたら代表になっていたという形。当初は貧困対策という言葉があったわけではなく、地域の子どもたちが豊かに育つ、それぞれに合った育ちの環境を作っていくということを取り組みのベースとしている。

0歳から子どもたちがやってくるが、大きく三つの活動があり、一つ目は、意思表示をする前の乳幼児とその親の「乳幼児・子育て支援活動」。二つ目は、子どもたちが関心を持つようになって、野外活動や演劇など「子どもたちが主体的に創る活動」。0歳から大きくなっていくまで、二つが重なっている部分のコンセプトは、「ひとつながりの育ち」である。法人を作ったときの代表がよく「人間浴」と言っていたが、人と人との交わりを子どもたちがたくさん浴びる。人同士が関わり合っている姿をたくさん見ていくことが子どもたちにとってとても大事なことで、そのような活動を作っていくようにしている。

三つ目が、「生活困難などを抱えた子どもと過ごす活動」。一つ目と三つ目の重なる部分では、日常的に困難を抱えていたり、悩みがあったり、一人で子育てしているという方々のために、相談や出会い、安心・安全を届けるというようなコンセプトで活動している。二つ目と三つ目の重なる部分では、困難を抱えている子たちも、抱えていない子たちも、同じ街に暮らす子どもたちで、生活環境はほぼ同じということ

で、地続きの中でどのように関わり合っていくかということ。それから、困難を抱えれば抱えるほど自己肯定感を高める機会が失われるので、二つ目の主体的に創るという活動を生かしてプログラムとして取り組んでいくということをしている。こういった三つ円が重なりながら、豊かな育ちの環境づくりを実現していければと思っている。

貧困問題についての取り組みも、活動をやっている中で出会った困り事を抱える子どもたちの背景を見ていく中で、表に出てくる困り事というのはただ表出しているだけで、その奥には経済的な問題など、子どもとの関係を後回しにしてまで生き延びるために親がお金を稼がないといけなような社会があるという状況が見えてきたので取り組んでいる。

2. 子どもをとりまく問題の増加

子どもの貧困というのは相対的貧困率で算出されていて、今の日本で当たり前といわれる所得の半分以下で暮らしている人たちというくりでしかない。その数値を捉えても、この状態の子どもたちを街で見つけ出すことはできない。「所得が幾ら以下の子どもは手を挙げて」と言っても、誰も挙げてくれないし、「困っている人、手を挙げて」と言っても必ず挙げてくれるわけではない。あくまで私たちは、出会った子どもたち一人一人がどういう状態にあるかを探っていくという流れ。そこから見えてきたものが社会全体にもつながるのではないかという視点で、社会化させていくということをやっている。

貧困以外の問題でも、今、児童虐待の相談件数が約12万件ある。1年間で約2万件増えている。中でも心理的虐待が

2015年の国民生活基礎調査結果（厚生労働省 2017年6月27日）

【相対的貧困率】

16.1%（2012年）→15.6%（2015年）改善

【子どもの貧困率】

16.3%（2012年）→13.9%（2015年）改善

【ひとり親家庭の貧困率】

54.6%（2012年）→50.8%（2015年）改善

【所得中央値】

244万円（2012年）→245万円（2015年）改善

【貧困ライン】 122万円変化なし

- ・この間消費税増税があり。
 - ・所得では改善傾向ではあるが、諸外国との水準からするとまだ高い。
 - ・現場で受け入れる子どもの数が減っているわけでもない。
- <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>（2017年6月28日アクセス）

半数を占めている。後々子どもの発達や人格形成に大きく影響すると科学的に捉えられてきたため、それも数値として上がるようになった。

また自殺の問題にもつながるが、いじめが増えている。前年比で10万件増だ。これも、捉え方が変わってきたのと、それぐらいなら大丈夫だろうと思って目をつぶっていたものもきちんとカウントするようになったことが大きい。法律が変わったこともある。子どもは減っているのに、問題は増えている。その中で、地域や社会が子どもをどのように受け止めなければならないかということが問われている。家庭や学校を変えていくことももちろん大事だが、いったん避難する場としての地域、安心できる場としての地域が今ないと、結構つらい子どもたちが多いのではないかと思っている。

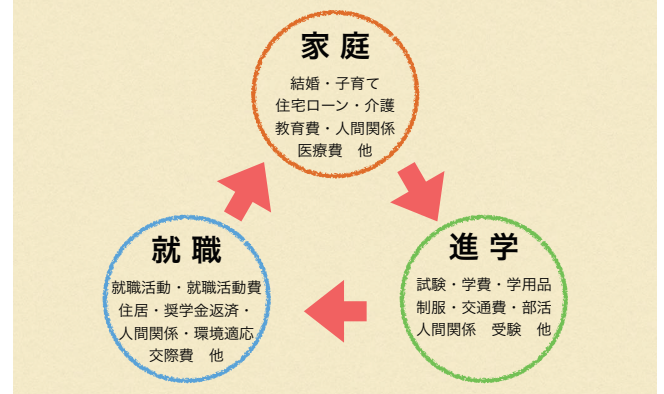
世界が目標に掲げるSDGsでは、あらゆる形態の貧困をなくすということがいわれている。日本における貧困問題ももちろん入ってくる。「日本で暮らしていく上では」という基準を置いたときに、やはりそこに届かない子どもたち、それによっていろいろないじめや虐待を受けてしまう子どもたちの率が、他の国に比べても多いのではないかということが示されていると思う。それが顕著なのは、自殺の数字。日本の若者の死因の第1位が自殺だといわれている。平成28年度には全国で小学生12人、中学生93人、高校生200人、大学生・専門学校生471人が命を絶った。自殺も、いじめも、虐待もそうだが、何か一つの原因があってそういう結論に至るわけではなく、さまざまな要因が重なっている。そのさまざまな原因を生み出しやすい土壌として、人と同じことができないとか、生活を安定させられないとか、孤立しているなどということがあって、それを生み出しやすいのはお金にまつわる貧困問題だということがいわれている。

3. 子どもの貧困とは

子どもの貧困は親の貧困だという話がある。もちろん所得だけ見るとそうかもしれないが、貧困の定義はお金だけでなく、いろいろあると思う。お金の話と、お金がないことによって起きる出来事が大変で済む話なのか、それが解決できないという話なのか、困った結果いろいろな人から仲間外れにされるという二次的な現象が起きているのかということだと思う。お金の問題を解決するという意味では親の支援が大事だが、子どもには子どもの人生があるので、お金以外のところもきちんと見ておかないといけない。

それから、子ども時代だけ支援すればいいのかということそうではない。少し助けたらそれでいい、進学させたらそれでいいとなりがちだが、子ども時代は安定していても、大人になってつらいということは、誰にでも起こる。大人になったときにそのつらさを乗り越えられる力が身に付いているかどうか、あるいは助けがあるか、蓄えがあるかというのは大事だと思う。子ども時代に何があれば、その先々の人生が大丈夫かという目線で関わる必要があると思っている。従って、お金の問題を気にしなくていい環境と、困り事に対して解決手段が思いつく環境を両方整えていかないと、望むキャリアはなかなか作れないのではないかと思っている。

関わり続ける必要性・子どもが将来迎えるライフステージ



日本で暮らしていると何かとお金を使う。お金がないと、不十分な衣食住といっていないわけではないが、少しずつ不足していく。3食だったのが2食になったり、1食になったり。一人親家庭の貧困率が結構高いが、子どもが生活習慣を身に付けるまで大人たちが関わり切れな場合は、歯磨きが下手だったり、お風呂に入っているのに不衛生な状況だったり、不健康な状況だったりする。そういったものは親たちとの長時間の関わりがあってこそだが、そこが不足してくるの

で、どうしてもできない子どもや、間違っただけの習慣をずっと続けている子どもが結構多い。それが最初はいじりのネタだったのが、他にも間違っていることがたくさん出てくると、だんだん本格的ないじめに変わっていく。排除の構図ができてきたり、「何かおかしいな、おまえ」とか「間違っている」といろいろな場面で言われ出すと、不安になる。一個一個は小さくても、それが積み重なって困難が大きくなる。

不足しているものがたくさん重なった結果、進路を諦めたり、誰かと一緒に過ごすことを諦めたりして、貧困状態が連鎖していく。それがだんだん大きくなって、さらに若者、大人、次世代というふうに連鎖していく。困難な子どもたちが高卒とか中卒で暮らしていくとなると、同じような状況の子どもたちが同じような場所に集まってくる。結果、そういう人たち同士が会って結婚していく。こういうサイクルが20年ぐらい、早ければ15年や16年で回る。今、大卒で働いて結婚した人の第1子出産時の平均年齢が30歳を超えているので、10年の差ができる。困難な子の方がサイクルが早く、なおかつ低賃金だ。大卒の場合は高所得でサイクルが遅い。少子化や晩婚化が進む中で、その差はより激しくなるかもしれない。

子どもの権利の中に含まれている安心や、安全に生きていくこと、自由、チャレンジ、選択などの権利が、権利自体の総量は変わらないのだけれど、制限が掛かって使えない。もしくはその総量に気付かせてもらえない。元々自分はこれだけしかないと思わされるような環境でずっと過ごしている。それは結果として未来の権利を奪うことにもなり、子どもの未来が非常に狭められたものになっていくということだと思う。

4. 民間・行政・地域の役割

こういった問題に対して、今、民間の動きが活発になっている。子ども食堂や、学習支援、給付金、返さなくていい奨学金などを、各企業が作り始めている。行政としても法律ができて、何かやろうとしている。ただ、財源がないという理由の下に何もされていないのが現状だ。そこを民間が支えていくという動きが出てきていて、民間がやっているからいいではないかという気配になっているが、そこは違うと思う。どうしていくかということをもっと声を上げていかなければならない。

大きな網をたくさん役所が作ろうが、民間が作ろうが、こぼれていく人たちがいる中で、それを救う網や、お玉のよう

なものを作っていけないといけない。それを作れるのが、地域住民の一人一人のまなざしではないかと思っている。

僕たちの貧困対策は、子どもや家庭との関わりの中の気付きから始まっている。あくまで住民や市民として子どもと出会い、解決や対処に向けたアクションや、そういう問題が起きないために問題を社会化していくアクションを起こしながら、実際に社会化に必要な人、政策化していく人たちを巻き込み、社会全体で子どもたちの求める社会や未来に向かっていかなければならないのではないかと思っている。ここまですると、まちづくりに近い話になってくる。対子ども、対ファミリー、対学校というレベルから、地域や社会の仕組みに変えていく。そのためにはいろいろな人たちの力が必要。自分たちだけの事業が解決できる唯一の手段だということではなくて、いろいろな人たちの力によって解決がなされていくということが大事だと思っている。

僕たちがやっていることは、出会った子どもたち一人一人の暮らしや状況を見た上で、その子にとって不足しているものを埋めていく。その子がこうしたいと思っているものに手を届かせるということをしている。その中で、まずは安心や安全、自分を肯定できる力を育てていきたいと思います。その方法として、食事、交流、発見、学び、遊びをやっている。子どもは自分がいて、その周りに家族がいて、学校がいて、地域がいて、何層もの生活環境の中で暮らしているので、安心・安全や自己肯定感からスタートする。その次は親御さんで、活動のやりとりの中で相談に乗ってみたりする。その次に子どもたちが暮らす学校をサポートしていく。そうやって、そこに関わる人たちを増やしていく。そのためには地域にも理解してもらわないといけないので、ネットワークを作っていく、政策を変えていくという順番でやっている。

当たり前を埋め直していくということなので、実際にやっているのは、普通の家でご飯を食べるようなイメージ。僕たちの場合は、どういう課題を抱えている子どもたちかということも、ピンポイントで来る分、分かってしまう。だから、一人一人に何ができるかというスタンスでやっている。ただ、例えば初めてこの場に連れて来られると緊張してしまったり、親御さんも「なぜあそこに連れていくのですか。うちの子は問題があるのですか」となってしまうと困るので、地域の祭りやイベント、僕たちがお手伝いしている地域の子ども食堂に連れてきてもらって、出会っておいて、「そんなに大変だったら、一回うちに来てご飯を食べませんか」と言って、個別の関わりに持って行くという、入り口の捻出をまずはしている。

子どもたちは将来迎えるライフステージでかかるお金を見通さずに過ごしているのだから、そういうことも伝えていく。生活保護世帯ではバイトをすれば収入認定され、生活保護費を削られるが、手続きをすれば問題ない。僕たちはそういう子どもたち向けに、受験が終わるかどうかのタイミングで福祉事務所の人に来てもらって説明してもらっている。「もし君がバイトをしたいのだったら、ちゃんと手続きするのだよ。分からなかったら、こどものひろばのスタッフに聞けばいいから」と伝える。直近の未来の話をしながらか、少しずつ一緒にライフステージを上がっていくということを意識している。

子どもの貧困と子育ては、日常生活に影響を与えることなので、似たような課題や問題が起きているのではないかと考えている。どちらも毎日のことなので、毎日、何か足りない。部活動の帰りに友達はいつも買い食いしているのに自分だけはしない。友達に「どうしたの。買わないの?」と言われたら、「うん、ちょっとダイエット」みたいなごまかし方をしないと行かない。それが1回だったら何の問題もないのですが、これが毎日24時間、何かしらの場面で起きて積み重なっていく。

子育ても、特に一人で子育てされている方は、自分がやっていることがうまくいっているかどうかということに非常に敏感だ。貧困の場合は、子ども本人が、あの子は携帯を持った、あの子は今はやりのあれを持っているという話から孤独感を感じていく。しかも、何のためにそんなに我慢しなければいけないのか、耐えないといけないのかがピンとこない。貧困の子どもは親から学校のことを聞かれ、先生からも進路をどうするのかという話をされる。子育ても、そろそろ塾に行かせた方がいいのではないかなどと周りから言われる。みんなは経験しているから助言のつもりで言っているのですが、それがかえって痛い。それよりも今のこの痛みや

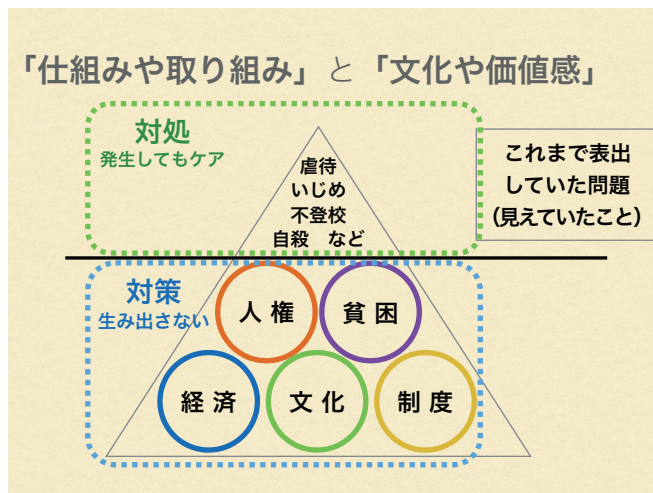
苦しみを何とかしてほしいのに、それに応えてくれる人はほとんどいなくて、必死にやっているのになぜか未来を求められる。

つらい状況に置かれている人は、今を消化できないので、未来にも向かえないという苦しさがある。そして未来に求められるものはどんどん増えて、宿題はたまっていくばかり。気が減入って、引きこもりたくなる。今までは、虐待やいじめ、不登校など表に出てきていた課題への対処がされてきましたが、それだけでは追いつかない社会になってきている。学校は子どもの数に対して先生を配置するので、少子化が進めば先生も減るが、解決しなければならない問題は増えている。そういう矛盾に対して、制度を変えていかないと行かない。いじめや虐待の認識として心理的なものが増えてきたのと同じように、今の貧困問題も捉え直して、もう少し大きな価値観や文化、仕組みというものを見直していく時期に来ているのではないかと考える。

5. 道筋・回路・価値をつくる

子どもの貧困問題は、「なぜ」と問われても本人が一番分からない。周りの人たちは親の貧困の問題だと思っているし、子どもたちは物心ついたときからつらいので、分からない。自分の中に最初の「なぜ」がないので、余計に分からない。しかし、いじめられないために、友達を減らさないために、そういう違和感や不快感を押し殺して、劣等感や羞恥心をごまかして、ときには小さなうそをつきながら乗り越えていこうとする。それは結局、ネガティブな感情として毎日蓄積していき、ある一定のところで爆発する。

昔乗り越えてきた大人たちが自分の物差しで大丈夫か大丈夫でないかを判断するので、余計に分かりにくくなっている。そういう意味では、今の時代を測る新しい物差しを、行政、政治、経済、文化、教育の領域でみんなで議論して作る時期に来ているのだと思う。それは言ってみれば、道筋を作るとか、回路を作るとか、価値を作るとかという話。それができるのは、前の世代の子育てを知っていたり、貧困を知っていたり、社会のつくり方や運動の仕方を知っている人たちと、これから生きる人たちがまだ混在しているこの10年間ぐらいの間ではないかと思っている。仮想通貨やキャッシュレスの時代になると、恐らく貧困問題などの支援方法が変わると思う。そういう時代においては、何を大事にしなければいけないかという、支援者の倫理観や道徳が問われること



になる。そういったことは、今のこの移りゆく時代の中でこそ考えなければいけないことではないかと思っている。

貧困問題をやっている、昔つらい思いをしていた子たちが活動している場面に出会うが、みんな口をそろえて「僕たちはラッキーだったのです」と言う。つまり、先生が面倒を見てくれた。そういう出会いがあった子たちは何とかなるのだが、そうではない子たちの方が圧倒的に多い。それは、昔経験した人たちが自分の物差しで「あいつはやんちゃだし、駄目だ」「こいつは大丈夫」などと測って勝手に判断したり、つらそうだと気付いても、自分の物差しで測り直したときに大丈夫そうだと思って忘れていっている。従って、気付き力だけでなく、気付いたことを気にかけて続ける力が大事だと思っている。

6. 他者との共存と出会いの場づくり

今、いろいろな世代が共存し、議論できる時代の中で、昔の人たちの当たり前と今の人たちの当たり前は人権感覚も含めて随分違うので、それぞれの正義や当たり前で議論するとぶつかる。その人の当たり前を否定してしまうと、その人の存在を否定してしまうことになりかねない中で、一つ一つの価値観や考え方の違いというのは、議論の余地があるということでもある。違うからこそ対話ができる。相手の価値観をある程度受け止めた上で、そこを生かしていかないといけない。そのためには出会う場が必要であり、結果として子ども食堂のような場が非常に効いてくるのではないかと思っている。

友達のつくり方一つとっても、昔と今では違うと思う。今の子どもたちは最初からみんな仲良く、みんな一緒という感じで、ここからこぼれないようにコミュニケーションを取る。だから、人と違うとか、孤立感というのは大事なポイント。一方、昔の人は一人ずつ親友をつくっていく。今の子どもたちは、こぼれないために見えを張ったり、同じことをするためにお金を使ったりする。みんながインスタ映えする写真を撮りにカフェに行くと言ったら、お金がなくても付いていく。昔の人からすると、インスタ映えなどつまらない。そういう価値観や関係づくりの違いをお互いに知らないといけない。

最近、third place (第三の居場所) が必要だという話が

言われている。単に三つ目という意味ではなく、その人にとって、家庭や学校などに代わる安心できる場が必要だということ。役所などは、単に三つ、四つ、つくれば良いというような話になりがちですが、そうではなくて、子どもにとって安心できるワンモアが要るということ。そこではお金以外のやりとり、最初に言った人間浴のようなことが大事なのではないかと思っている。

そういう中で、僕たちは、子どもたちの生活圏で子どもたちの課題に応えるために、どういう人たちとどういう場所という組み合わせをして活動している。従って、まち、出会う人、子どもの希望などの組み合わせによって、規模感も頻度も随分違ってくる。毎週やるものもあれば、月1回のものもある。選別するものもあれば、みんな来ていいというものもある。醍醐地域では、各学区で起こすアクションに関しては地域のネットワークで支えるという仕組みがあり、誰でも来ていいことになっている。こういう仕組みづくりもこれからは増えていこうと思うし、僕たちは仕組みを作った上で実際にアクションを起こしていくお手伝いをしている。逆に山科では、次に足りないものは何だろうかと、対話型で議論して作っていくことをしている。

それから、第三の場づくりにも関係するが、そこにいる人たちが言葉掛けを意識しようということも言っている。足し算の言葉掛けと引き算の言葉掛けがあって、例えば100点満点で70点を取ったときに、何を間違えたのかと、できなかった30点を指摘するのが引き算の言葉掛け。逆に、何ができたのかと、70点側を見るのが足し算の言葉掛け。納期が決まっている学校の先生は、できていないことを指摘する方が早いので引き算が多くなる。しかし、みんなそれに慣れてしまうと、それ以外の大人も「宿題はしたの？」など、できないことを見ることが多くなっていく。しかし、納期のない地域は、できるようになるまで何年かかっても別に困らないので、できたことを見ていくような足し算の言葉掛けを意識しようということも僕たちの中ではやっている。そうやって少しずつやっていると、子どもたちは自分の物差しを作れるようになって、引き算の言葉掛けをされても、客観的に受け止められるようになる。まずはそこが大事だということで、活動の中で大事に育んでいこうとしている。